

中村 賢次さん

◇なかもむら・けんじ 1962年、熊本市生まれ。日本画家、崇城大芸術学部長、日展特別会員。金沢美術工芸大大学院（日本画）修了。文化財の保存修復では京都・知恩院山門天井画（国重文）などに携わる。本紙夕刊連載「黒船前夜」「モントルバン」「新・地図のない旅」の挿絵も担当。

ジャンル狭めず 赴くままに

表現領域の広さに息をのんだ。第一線に挑み続ける日本画家の中村賢次さん（57）は、崇城大芸術学部長・教授の大作18点は、愛する家族を見つめた人物画や欧州の街並みを描いた風景画、自然のうごめきを捉えた抽象画まで実に多彩だ。熊本市中央区の肥後の里山ギャラリーで開催中の「熊本の現代作家展」第5弾に合わせ、これまでの歩みと展望を聞いた。

（魚住有佳）



肥後六花を鮮やかに描いた新作の屏風絵を前にする
日本画家の中村賢次さん（熊本市中央区）

熊本市で作品展 人物、抽象…多彩な表現

半数近く新作を並べた。「関東や関西の日本画の世界では、個展で過去作品を出すのはアウト」なのだという。屏風絵は熊本で初制作。肥後六花を鮮やかに描写した花鳥画もあれば、熊本地震で街や地面が崩れる様子を表現した抽象画もある。

20代の頃、多くの先輩作家らに「おまえは何がやりたいんだ」と言われた。いずれ一つに絞り込まれるとも思っていたが違った。「湧いてきたものを心の赴くままに展開していった」。ジャンルを狭めない表現への姿勢は、30年以上たっても変わらない。

日本画との出合いは熊本高時代。美術教諭だった日本画家の姫野豊氏が、美術準備室で広げていた無数の岩絵の具に心を奪われた。デザイン分野への進学も考えたが、将来の職業を考えると幼少期からの吃音が引っかけた。「絵画なら1人で完結できる」。受験先を難関の金沢美術工芸大の日本画専攻に切り替え、見事現役で合格した。

在学中は毎日描くことで徹底して基礎を体に染み込ませた。日展に初入選し、故郷の県美展で大賞も受賞。大学を首席で卒業し、同大大学院に進んでから

も、興味のあるものは何でも描いた。

「身の程知らずだが、何を描いても格好いい作家になりたいと思っただけ」

その後、京都に移り日本画家の西山英雄氏（故人）に師事。最後の内弟子として3畳の部屋に住み込み、絵描きとしての生き様を学んだ。25歳で日展の初特選に輝いた後は、国重要文化財などの保存修復にも携わった。

帰郷したのは崇城大芸術学部が創設された2000年。後進育成はもとより、神社の絵馬・天井画などの修復にも尽力してきた。何より「熊本にいなから第一線で戦える作品を出し続ける」ことを自らに課した。そのためにも「何かに出会い、感じた瞬間を見逃さないこと。受け取る感覚をいかに磨くか」に重きを置いてきた。

制作を続けるには「自分をリセットしなければならぬ」とも語る。県内では12年ぶりとなった大作の個展も、けりをつけるいい契機となった。

「次どこを向いて一歩を踏み出すか。僕が一番楽しみ」と破顔した。

※「中村賢次展―伝統と挑戦」は4月11日まで。入場無料。